

仇誥七部集

卷みの

三

第拾云部
能發部
内冊云部
書藏池鷺

中村俊定文庫

文庫 18

686

3

8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3



晉其角序



鄙諧乃集つる事古今り
 かりき道れおまへ起通
 き時たれや幻術の事一也
 しそろれ白り魂そ入さ
 えゆ免よ極めさるに似
 海一久一一世よ〜ちり
 ちくんようりて不愛此愛

を志し五徳のつよき人
はらふをこころ通さるる人
こたはり彼あり上人の骨
てんを作つて神の魂
ふくみ笛を吹かすにたし
とりされを人よ成て結
ゆるを五の舞のまじりて
及魂の法れをあらうのよ
結ぶ

屋のまじりたる人
しアイウエヲクくひき
いふはく吟舞をかぬ
し只能階の魂れ入る
よころとて我翁行脚乃
伊加越し山の中
後より小義を看せ
乃神を入るる人

ちまも新腸たおまを呼
ふも神あまに懼る人まの
術ちりく神をえりて此
集をつくもく様そのい名
付りし建者も是く序まそ
れらりしり魂を合せり去来
元兆乃ほ一也たのよまうせ
書

猿蓑集卷之一

冬

初し猿蓑を小蓑をほり也 芭蕉
あまのけをほるまの夜は神の
時多し也並ひくも新し也 千那
幾人くし猿のぬぐ物田代橋 僧 丈州
總持の形振りくしく建也 膳所 正秀
く廣にやらしり時多し 史邦

舟人のあはれきりし可なり 尚白

伊賀の境より

かろくや奈良の隣乃一時而 曾良

時申くや早本つし屋の窓あり 凡兆

了りて竹田の里やけし我 乙羽

多すまされ一早の光や小夜時毎 羽紅

新田は釋穀屋のしき事 昌房

いづれや沖の河をたき帆片帆 去来

もろねよけや北平代早のあ 百歳

いづれも動く地なきを我に 野水

流る

しづかに舟とわたりし船の中 其角

歸るはるはる志ん途切し 同

禅もれ雲のなほ空や那半の月 凡兆

百舌をのめりて舟に松よ十月 嵐蘭

かろくや頬腫痛む人の影 芭蕉

伊賀

膳所

大津

かよけの延喜のころの冬よき 凡兆

たの〜として

梓麻のこころの枯ゆれ 伊賀 土芳

流杯をわらわて過ぎた夜外 膳所 裾道

ちやの〜ぬやけ〜人 伊賀 越人

よのむほ茶のよゆ〜おきり〜 伊賀 猿錐

おちけ貴子も春〜冬〜 伊賀 凡兆

公羽の堅田小軍始を〜

雑水のか〜らんが〜ハ冬こもり 伊賀 其角

こ乃〜ま〜牡丹の〜ぬま〜の裸 伊賀 車来

草津

あひま〜る〜り〜の〜これ 伊賀 尚白

神逆水の〜ま〜ら〜る〜 伊賀 珍碩

霜月朔旦

搭ま〜ら〜お〜物〜 伊賀 良品

水き月れあを〜 羽后田 不玉

今六世より七世までや冬の録 尾張 目葉

尾野のころのころの海原 去来

一、夜くさむき海や釣千草 伊賀 探丸

こらこらに多賀村の井のき 尚白

茶湯のころのころの目も極 比叟

炭竈より多賀村の側 九兆

住つぬ娘のころのころ 芭蕉

寝ころや大蛇浦園のころ 其角

内前此小冬船もあろう 九兆

本兔や地まじり 尾張 茨境

こつこつ八眼のやま 伊賀 半残

貧交

まーららるゝ孤子れ切と譲り 大州

浦風や巴をくらす 曾良

あゝ儀やいゝと刻 去来

狼のあゝ踏消すや 史邦

背門口乃入のほるちちれ 丈艸
 いし道々雪よまきして鳴千鳥 千那
 矢田の神も浦のあつれは鳴ちち 元兆
 竹伐されんる跡や鷺鳥の中 本節
 水底をさへて見ゆ魚の小鴨哉 文州
 ちんちんも寝たをわらふ余吾の庵 路通
 死まへ採成らん鷹はくか 貝藁
 襟をさへり首引入る冬月 秋風

天お戸や鎖のまされて冬月 其角
 かくちりた蒲団をうりや冬の寝 長崎 暮舟
 見えん旅人ふり 石部山 大津尼 智月
公羽り柳れあもき衾をとあへ
らる籠あり略く
 首出してさへる雪をんちやけ衾 義濃 竹戸

題竹戸之衾

玉をわ我のまけあしそ紙衾 曾良
 魚のけ橋乃やるせがさ吹か 探丸

志のこゝろに教珠のたのす網代香 史州

伊白砂は候す

膝つこゝろにまらり居る霰のれ 史邦

桜櫛のふたは霰は狂ふありけ 野童

鶺鴒乃橋らりわとけす霰散るれ 伊賀 示蜂

呼ふとけ射賣つんぬあはれけ 凡兆

こころれ海よりや朝飯のせあは 膳所 晝好

こころち内よ居はれ人へ傳 其角

初雪よ雪部屋のうく朝顔 史邦

おちやけのふか吹くやも雪は 羽紅

つらもつら凡れ教のこ射賣らけ 探丸

下京ちちつむとほ夜れる 凡兆

ちちつと川一筋やちちのふ原 同

信濃路をとるこころ

ちちらちち木植屋に居るれ 芭蕉

草庵の留は候す

養老の巻もあけと巻れど 其角

高れ目ハ竹の子筈うはらりる 尾張 羽立

滑ゆるも健あつハ高れど 長崎 卯七

いりりてちや舌のて 長崎 去来

青亜追悼

乳のこ子に世を海も歸去 或 尚白

うゝ舞も元也の慶をきれ内 芭蕉

餅と記帳ハ歌は似ぬとつ 或 乙卯

一月ハあゝ米もや 或 文州

住吉奉納

夜神糸や鼻息白一面の内 其角

節季候よ又の心も 伊賀 須琢

あゝやうらやま 同 祐甫

乙卯 新巻

くゝ家もさう 或 芭蕉

弱法師 或 其角

歳の夜や曾祖文をゆげふ手枕 長和
 うす望れしそはあやうくの香 去来
 らきては事始まけや伊勢の 同
 大とーやまはまろ結ぶるくそら 羽紅
 やららねく又やまむくろ義の層 其角
 い孫のく人よいこまう年れ春 路通
 糸のく我破は襦袢幾くそり 松風

猿蓑集卷之二

夏

有明の面みそすやほくまに 其角
 夏すそと日さすくし燕や時鳥 木苅
 おもを様よきくしはよにす 芭蕉
 時鳥くしよあまらして海なる 尚白
 けりなはけ何もなまおく門搦 凡兆
 しるさすまのしるさす時鳥 智月

蜀魂たゞくやまのり角櫓 史邦

入おれしきよの中やにほき 羽紅

ほほほにほきよのちかあつたれ 丈艸

ふたも代官あやほくす 去来

こい死を我塚てあけあつた 遊女 奥羽

松鴉一見の所中をうらや
まの毛衣とあわられ

去鴉やまのりあつたれほくす 曾良

ふもあつたれほくすあつたれほくす 芭蕉

旅館庭でまじく
庭草をとるす

あつたれほくすあつたれほくす 膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

あつたれほくすあつたれほくす 其角

あつたれほくすあつたれほくす 全峯 江戸

別僧

あつたれほくすあつたれほくす 越人 ナシノ八十

あつたれほくすあつたれほくす 珠碩

翁は侍られてすまはるる
しりし

似合しよけの二宮の里 亡人 杜國

まらさき句のけのま 嵐蘭

井はすゑのしづし 杜の 半殘

起せしめよまきつね
朝の回乃

起くのむらさきかまつ 仙化

題 去來之塔 峨洛柿舎

巨椀の初の本魚屋を名延か 元北

破垣やわらば麻子たがひ道 曾良

南都旅店

誰のこゝろにたれ朝乃園に相 千那

洗濯やもあはれとて 尾張 薄定

豊國よて

竹の子れ力を得よむらへき 元北

多けれ子や白濁し 去來

たけのこや稚すめり 芭蕉

猪ノ吹入さきくさきくし 正秀

明石夜泊

晴きやしむのよき友は月 芭蕉

君の代も梅屋茶を鍋一ツ 越人

五月三日

しつまつていさかえ

石の音とまきくしける高瀬也 其角

粽はふかきふかきむ額髪 芭蕉

隈篠の廣きふらり餅粽 岩翁

さしきた客人やとまらり也 尚白

五月六日大坂より死の
遠忌を吊しり

大坂や刃ぬれ身乃五十多 蝉吟

奥羽之館にて

葦草や兵九くゆん乃跡 芭蕉

這出よわい屋下此蟻の跡 同

け境をいひしるるあしき
こころ事しや

かこつり角かりしけは浪の石 同

五月あゝ家あり控てあゝらゝ
元兆

しほまふれ味なまゝやあり
丈節

るとの謂はれありさつと雨
史邦

奥羽名取の郡よゝく申為るまの
の塚はいつくゝやと存傳せし
道より一里まゝありたり乃方
笠落とつやあゝまゝとまゝゆ
ありつゝまゝも五りいゝとら
あゝゝあゝゝゝゝゝ

笠落やいつとみればぬり道
芭蕉

大和紀傳のさゝいゝとあゝ
て往來の形をさゝゝゝゝゝ

すめたるまゝの料はいつゝゝゝ
紙のゝゝゝに書つゝゝゝ

つゝゝゝのゝゝゝゝ
去來

髪剃や一夜よ今情をみり
元兆

目の道や葵枯くさ月あゝん
芭蕉

雑地や若もさゝゝゝゝ
羽紅

七十余の老醫をまゝりて
斗ふんたこゝりてかゝゝゝ
にいゝゝの句をけゝるれを醫
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
る人よあゝゝゝゝゝゝゝゝ
知ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

けしき年よとくしとくしとくし
ゆきさきりりきき

六月の力がくくや五月あをん 其角

百姓も妻よ取つく茶摘可 去来

志くくもや茶山くくはまぬつれ 正秀

つみ合ふるれけけや妻鳥 游力

孫と愛しく

妻を余れ家しくやらん雨蛙 智月

妻出まて鯉道吟くく山や水部 花紅

志くく川の関くく

月流のくくや奥け田捲くく 芭蕉

出羽のくくとあきく

眉掃をと面影くくく死粉のま 同

法隆寺南帳
南無佛のち子を拜す

法袴くくくきなうくく粉のま 千那

田の畝け豆くくくり 伊賀 万守

膳所曲水之樓く

螢火や吹さらけまじりし鴉のやま 去来

夢田乃螢火二句

闇の夜や子た泣きまじりし 九兆

けしきもや船頭酔てあつたれ 芭蕉

之熱野へ清きもの時

螢火やこゝろありき 八思尾谷 田上尾

あられらよ霧と 下りあふぬら 尚白

草むしや百合の中こゝろの白 半残

病後

空つらやわらふつゝ 百合のま 何処 大坂

すけや家よりあはる 百合の花 乙羽

穢蚊辞を作らる

子やならん其子の母を蚊の吟はし 嵐蘭

餞別

とととや蚊屋のうらぬ蚊の音 里東 膳所

うらぬ蚊の音よ 系宮するは者よこれむし

不^レ下^レ、夜と昔の冠者よみ給哉 其角

障^レぬや蚕の生くは耳乃^レ穴 文州

下^レ雪^レ也地^レ凍^レた^レる^レは^レ蟬^レの^レ死 嵐雪

客^レありや^レ指^レを^レか^レゆる^レ鯨^レの^レ聲 膳所探志

け^レく^レ死^レぬ^レや^レま^レる^レま^レす^レ鯨^レの^レ死 芭蕉

表^レさ^レや^レ音^レ麻^レ州^レさ^レあ^レの^レ海 伊賀槐市

渡^レり^レ鯨^レく^レ藤^レの^レ花^レの^レう^レ流^レ哉 元兆

舟^レ引^レの^レ妻^レの^レ唱^レ奇^レの^レ合^レ歡^レの^レ死 千那

白雪^レ也 鐘^レす^レよ^レつ^レき^レ日^レれ^レ夕 史邦

素堂之蓮池邊

白^レる^レ也^レ蓮^レ一^レ枝^レの^レ控^レり^レつ^レま 嵐蘭

日^レ燒^レ田^レや^レ鳴^レく^レつ^レつ^レ鳴^レく^レ蛙 乙羽

日^レ乃^レ日^レ者^レと^レ鹽^レの^レ池^レの^レ蟻^レ ソシガくれ 元兆

水^レを^レ日^レの^レ鼻^レつ^レき^レあ^レる^レに^レ殺^レき^レを ト 因

日^レの^レ曇^レや^レこ^レろ^レく^レ果^レと^レ牛^レ村^レ台 正秀

ま^レろ^レ果^レり^レ蘇^レり^レの^レ後^レの^レ房 木節

猿蓑集卷之三

妹

梅風や蓮花ちよよ花一

不知
讀人

此句東氏よりききし

素堂

かひくちのめけ初る齒也秋の風 秋風

芭蕉屋より何よあれや妹の風 路通

人よ似て梅のまよと廻りたのち 珍願

加賀乃全昌寺に宿す

終夜枯竹のきくやまのふ
 曾良
 芦原や踏馬の寝ぬおを輝の風
 江戸 山川
 あまのやのや鬱合留れ枯のふ
 凡兆
 しく霞や枯の臥芝の起あらし
 去来
 大比叡やこもぬお草のやほき
 野童
 と葉ふらりて跡とわれもや和の音
 凡兆
 文目や六りもよりの夜よ似す
 芭蕉

合歡の本代をわらふよと早あけ 同

七夕やあまのついでにうらふらぬへし 杜若

伊賀小舟

こやここの位よりさうり相撲取 去来

朝のほろろ寝るちのちりりし 伊賀 風姿

膳所

あまのちのこの邊にほろろす 及肩

あまの位よそよとほも権ふし 嵐蘭

あまの位よそよとほも権ふし 秋風

あまの位よそよとほも権ふし 千那

しるしのねくぬるあききやぬ敷雨 史邦

そよよか藪の四より卯あじ 且良

秋風やよしの海へくくくす 子尹

迷ひ子の親めくくやすき東 羽紅

ハ瀬おりに遊みして業 しのの文あけの序あま

まきく揚乃先代海らぬ 凡兆

つーーくくくくくくくくく ぶくくくおせにふて

思ふよのくくくくくくく 去来

草刈より秋の思ひくく秋の雲路 李由

平田

え禄二年公卿又伏せききて
こちのくくくくく三越後又ゆり
り柳くくくくくかの國よて
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくく

いつくまきたれ即も秋の東 曾良

桐のよもくくくくくくく 芭蕉

百舌鳥あくや入るくくく 凡兆

初層より秋をれまきくく 落梧

亡人

望田よそ

痛属れは後さしよあて瘡かさ 芭蕉

海との舟を小海老よまのい 同

加賀の小寺と云ふ又々田乃
神社の宝物と云ふ又豊
うさきうさき乃うさきとい
錦のきれをさきと云ふな
うさきのあきり懐かきおひ

心えんやし甲のよれきりくす 芭蕉

采島や二島よ中の虫 尚白

こころや望よまの夜月よ 風姿

いかにあはれしとて

葉月や名鶴よ海人きりん 亡人 千子

こころ月に蝨つかのあきり 之道

粟稗とも月を夜あらぬと月 半残

月えんせん休見の鶴乃於都 去来

公羽をと世身舎よち

伊賀

杉もころころ松笠よらよる月夜 土北方

月乃^ハ空^ニを^リく^ル人^ノの^カ破^レる^ハう^らう^一
 僧^正の^いま^よの^小屋^にを^めて^し
 和^漸や^鳴つ^の浪^の飛^舟を
 一^戸や^衣の^やう^こし^く
 釋^の種^はる^途—^この^この^こ
 徒^糟や^かつ^の中^の食^す荒^島
 あ^やま^りて^きう^せぬ^鐘を
 嵐^蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音^らら^たら^葉山^の中^に
 し^つし^き拍^のあ^らま^り茶^の
 猿^枕麻^のつ^ま合^の軒^下
 鳩^々や^流柿^のの^齋麦^島
 と^ちや^下る^や糸^の大^凡
 鑿^釣ひ^のる^し鐘^つり
 乃^あの^向の^ふゆ^のち^の高^白
 茶^を切^る跡^まつ^る角^{なり}
 凡^兆 曾^良 子^里 珠^碩 半^残 高^白 其^角

猿蓑集卷之四

春

梅咲てし方怒乃悔もあり 露路沾

上臈の山莊よりうつくしき
候しきりりて

梅も春や山路稱入るかな か 去来

しんぞ香やふ入異半の角 加賀 句空

庭真

梅の香や砂利も流す各庭真 土芳

よき〜〜〜〜〜
ヨシト人〜〜〜〜

夢さして又一句いや母ほの梅 嵐蘭
百八の〜〜〜〜〜 其角
ひらり寝の能宿〜〜〜 去来
野田や序遊の〜〜〜 史邦
〜〜〜や〜〜〜 嵐南
〜〜〜日〜〜〜 如行

憶翁之客中

裾ぬく草をさ〜〜〜 嵐雪
〜〜〜踏身か〜〜〜 路通
七種や跡〜〜〜 朝〜〜 其角
家ゆか〜〜〜 根芥 丈州
〜〜〜の〜〜〜 其角
脈〜〜〜 同
鈴〜〜〜 去来
鶯の鳴踏〜〜 一桐

伊賀

一桐

雪やしら座一みりれ志るりふ 江戸 溪石

うらりやを道詠あうれくし 其角

鶯や下駄の齒よつく小田代上 凡兆

雪や窓よ夕ちをますんあう 伊賀 魚目

やめの雪を柳くしらハす 江戸 探丸

け溜ハきよめ持へき柳 江戸 卜宅

垣くくくへてしれ下柳 同 遠水

くくく川極変れよ柳 同 尚白

青柳の志るれや鯉の位所 伊賀 一啖

るりや鈴いす場乃 同 木白

待中乃正目 同 揚水

回ちよ 同

妻や 同 橋の妻 芭蕉

くく 同 切崎橋の意 越人

くく 同 移り 同 去来

雨路 同 餘寒の當座

来りよむらひのさしめぬ羽織ハ 龜翁

おのゝあはれらりしハ 尚白

出らりや極よあまれりハ 龜翁

と雲下ゆりハ 嵐雪

骨紫のわらわハ 九兆

白鳥や海苔ハハ 其角

くハ 松峯

まきぬハ 元志

陽炎や取つハ 荷ハ

あけぬハ 百歳

うらりよハ 土ハ

ほゆぬハ 氷同

舞ハ 九兆

ふけぬハ 芭蕉

いとゆぬハ 配力

狗脊の塵ハ 嵐雪

伊賀

尾張

彼岸よりとむる一夜二お郎 路通

よのしや常れあらうとて涅槃像 野水

花並ぬ裏ハ燕乃かゝるい道 九兆

まことく今や記のしゝの局 伊賀 沢雉

春ぬや屏風のふ草ふ花吹雪ぬ 嵐虎

うらよみかして

まゝるやうらりやるさう法門 猿錐

不性と金かこ起され春あめ 芭蕉

春あめや田舎のしれ雛賣 史邦

しるゝあめあゝや軒よあ花 羽紅

泥をちや田舎水の睦うらん 史邦

蝶こころる木を舞の竹や虫の糞 昌房

振翁や下座をよやまをさ年世雛 去来

まのけいこすれ雛の写巻のふ 伊賀 萩子

桃柳くらりありとやをんあれ子 羽紅

まゝれま境をのぬらうら 三河 鳥巢

里人の暗居しるる田畑られ 嵐推

鯨のまじく一と夜を寝よさら首のほ 加勢山中 半残

帝鳥切て白根く嶽をの来 伊賀 桃妖

いのほりこもすもや療 伊賀 園風

目の影やこもくれよの親すめ 珠碩

そ何寝ぬむ夷よのすもや縁の先 土芳

園の他や果なまこつてあへ衡 芭蕉

越より飛来へけとて籠の
つらりのあやましくさく道

まじらぬし
まじらぬし

舞むれ菓の樟の枯枝よ目みぬ 允兆

うすくうらんとるやみ 伊賀 石に

子や寝ん餘りそななのさああり 枚風

いしらあく中れ拍子や雉あお 芭蕉

芭蕉菴のふもをを訪

蓮草小鋸流しあへやこれ 江戸 曲水

木尻筋旅してあへく拍ああり 江戸 山店

畫讚

山吹や夕日の焙炉は白く特

芭蕉

白玉はあまきつづく様くれ

車来

わらわらわらわらわらわら
あつたれは髪けりうんのお
しつとつとつとつとつとつ

^{カカイ} 竹もろくそきやらり様

羽紅

鶯半おしよさつとつとつとつ

坂上氏

うしろよの笠やうくも様

芭蕉

うらうらうらうらうらうらうら

^{伊賀} 利勇

東叡しよあうぬ

小坊まやまあつとつとつとつ

其々用

一枝はゆあうらうらうらうら

高白

雞のあまのあまのあまのあまの

九杞

まをんまをんまをんまをん

丈艸

馬羽のうらうらうらうらうら

史邦

中斎しようまをんまをんまをん

千那

葛城のゆきをふりて

花さすやまはぬり神の顔
芭蕉

いづの国花垣のたはりの
南は乃ハ空橋の神よ附
らまきと云はれんらん色
我し

一軍ハこれ花争のふ縁や
同

云々の墓東武各寺にありて
と歳して死れ元年の夜よ
城よとらぬ墓のおよ橋柱垂
けりうーおひく女はあつこ
ううてうは橋をたつて後うよ
他の墓はさううはれはきこ

まうやち吸ふ野の往還
園風

知人よあまうとこありん
去来

あま僧の煙り一あめ熱い
凡北

浪人のやうき

嵐を尋ねの夜あれう花
半残

月さしとれ花中結ゆへ
長眉

これの奥もよ
うのうはゆき

大寺やうは奥乃あめ
曾良

道灌山よのけしき

る澹やまをくらの成を四の山嵐

源氏の強きかんこ

探子に夜ちる高れますの羽紅

一庚午の歳家を焼く

綾よりりしきまの北枝

しりらるや伽藍の樞や凡北

酒棠はしれ満より夜の月普船

大和の脚乃しき

草即ちちるはれぬのま芭蕉

山よりや躑躅よけは尾の探丸

やうつら海よらんや夕日歌智月

兔角して卯まつちじ録や山川

鷗鳥のみすうりてりりて歌れ式之

木曾塚

其よの石よのなはれますれたる乙羽

春風後よりぬお殿の堂籠 曾良

望湖水惜春

けしきをみよふのよはしきまの 芭蕉

猿蓑集卷之五

去来

鶯の羽を刷ぬまろしき我

カイツクPE

一ぬきし月夜よの屋志のまゝ 芭蕉

股引の朝のぬきしにまゝ 允兆

たぬきしをよすすの條張のまゝ 史邦

まゝのまゝのまゝ遠くかき月 蕉

人よみられす名物乃梨 来

瘦骨れすこゝ起坐す力なき
 隣をうりて車引こじ
 うまをを枳殻垣より懸ん
 いまや別の力さし出す
 せうけい掃てうらをうら
 地をい切さる花さしんよ
 青天よ有明月の影をけ
 湖水の秋乃比良れらるる
 蕉 来 邦 兆 来 蕉 兆 邦

紫のや蒼妻めすまはて歌をよ
 めのこ若智ぬ見れりる
 押合つて寝くハ又きつわ
 しられ中乃まるの赤き
 一搦鞆つくる意のこれ
 枇杷の右をよはまきり
 邦 兆 来 蕉 兆 邦

去来 九

芭蕉 九
凡兆 九
史邦 九

凡兆

市中ハ物のよほら也其月

あししくとく乃新 芭蕉

二番草一取の果は種よき 去来

庚くくくくくく一投 兆

以助ハ銀の足志す早自由は 蕉

たききくくくく長き根指 来

草村又蛙こはるのうまうま
落乃せきさちにはけいけい
道心のむらあはあれたるむ時
能やれ七尾の冬は作うを
魚の骨志りたる老を延そ
待人へへ小舟のの鑑
まうり扇風を倒す女子を
湯屋の行の筆子儂し

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

苗香れまをそ吹流すの風
傍やとしく寺りくく
さうりの橋をせとゆる様め
年へ一年の地子んもや
五六七とよまつらう家儲ミツタリ
足袋少くも黒ほろの石
追うて早よ流る乃刀持
うらうそ何よ水はほり

来 兆 蕉 来 兆 来 兆 来

戸澤子もむろのきの賣教 蕉
 えんきりもつわいつらさつく 来
 ころくも草鞋を作る月夜に 蕉
 蚕をさしむよ起し一、雨秋 来
 そめまのころころいさる林落 蕉
 ゆらみく蓋のありぬ半程 来
 草履よ暫く括るあやちり 蕉
 いのら娘も撰集れまゝ 来

さまよくよ品うらむる意より 蕉
 浮舟の果も皆小町ちり 蕉
 あにあり粥すも海へ 来
 舟のぬらむとちりも六度も極愛 蕉
 まはらぬ風遠くするあやちり 蕉
 おもひごとくあやちりの縁しきさ 来

芭蕉 十二

去来 十二

凡兆

灰汁桶のきやまらりきり

あかしのわすりてき自寝す秋 芭蕉

新雪あかりたる月うけよ 野水

あへて嬉し十乃とらき 去来

糸代経くま物を極く子問て 蕉

雪のたきにたらしる雪海 兆

丁も満ちて女は智恵ももてる
 何れもいふや 根乃ちた
 夕月夜星の管はははら
 人もちたわいあそあ水
 うそつは自慢いそそおは
 又もたそや此節をた出す
 根乃ち田の音やそそい
 加えた乃やそそ社あり
 来 水 兆 来 水 兆 来

抱うりた尻をさそそあ葉すそそ
 雨のやうりたそそ一迅速
 昼孫さそそ踏のそたはあそそ
 志そそ水は圃たそそいん
 糸橋股いんそそはそそり
 春そそ三月曙乃ち
 来 水 兆 来 水 兆 来

凡兆 九

芭蕉 九
野水 九
去来 九

餞乙卯東武行

芭蕉

梅の影をまわりの花のさうけ

かさあやうりそとむらの蝶々 乙卯

五云存あくお田よ土持はるれや 珠碩

志しき程よてりよれよる余 素男

片隅よ虫齒うえそて居るの月 刃初

二階の窓よとれよるあき 蕉

放やううつた跡はるるの母
 編の屋敷は乃力ちきうせ
 ちうしんれおまにける鏡屏と
 内鏡頭も呼あつたれ
 卯の別乃箕白に並ぬやめ方
 すまきさる木の志のさあり
 萩のれしうのれまこあて
 荏うしうる百舌るあの一勢
 男 碩 蕉 刃 碩 智月

懐よるまをさあやむる娘の月
 けさうまうぬあのはつら
 鏡の柄よるまうりるまのれ
 灰まきさうすありあ跡
 名 喜れ目よはま舞てくる孫机
 店屋あうし休のまうり
 汗ぬるる雪のまうりの糸
 まれせりしき雛乃下
 凡北 刃 男 碩 蕉 刃 碩 智月
 去来 兆 正秀 来 半残 土芳

大膽よゆきしつらむの風を
 身へわれ紙の取所をよき
 小刀乃拾又下る細工しと
 棚よ火とりす大年の夜
 うそとわねは後も後の風
 むの折合せをよきむの
 此よのれれをよきむの破扇
 碧油糸をよきむの日記
 残 芳 園 猿 残 風 雖

咳の隣はらも縁つと
 流ハハくよけりもくらんを顔
 歌のよき路をよきむの金付盃
 うすをよきむの糸の割下結
 花よとくつもよきむの
 雛の被をよきむの
 芳 風 嵐 蘭 史 邦 野 水 羽 紅

芭蕉 三

乙羽	五	土芳	三
珠碩	三	園風	三
素男	三	猿錐	二
智月	一	嵐蘭	一
允兆	二	史邦	一
去来	二	野水	一
正秀	一	羽紅	一
半残	四		

猿蓑集卷之六

幻住菴記

芭蕉州

石山乃奥岩向のうららよふら
 因分山と云うれを國分寺の名を
 傳ふたふへ一掃屏の初を流を流
 了て翠平巖よ及る中三曲二百六
 河々八幡宮のまじりし神体
 ハ跡隠乃る像とや唯一の家よ

甚忌むる事とを两部光成和の
利益乃塵を同く志たすは
又貴く一日比る人の詣さるれば
いしく神さし物志つるある傍は位
捨し草の戸をさすも根を軒
をさすも屋のまをり壁を以て狐狸
婦とをさすより幻位巻と云あは
の借なりハ勇士菅沼氏曲水子之

伯父よあん侍りしを今ハ八年斗
むしよ成るふよ幻住さ人の名を
のこ残さるり又市中あさる事
十年計ありてふ十年下らさる
身も養虫のふのをも先ハ蝸牛
家ヲ離て奥羽家沼の長老と目
下り面をさすもさすもさすも
ふしき北海の荒磯よさす

破りてと歳湖水の波は漂信の
浮巢の流らるる人さすれ一本
乃陰多のそく軒端羨あふぬ
えん垣の結信あふてお月れ
初いころりあつた入一ふあやう出
しとさくやまひうぬさけよ春
のうらたもあふつて一咲あり
ふあきあふぬく何ききしころり

程宿うしあれ後さくつらとあつた
のけりあつたあつたあつた
らとさういふし真しと魂呉楚東
南よさういふ身ハ凍湖洞あつた
ふあきあふぬく何ききしころり
あつたあつたあつたあつた
北風海を渡して涼一日枝のふは良
れあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

木樵の影り林蔭の小田よ早苗とる
奇雲を起しうる雲の空よ水鶴は
お音義景地とくまのくま
わくし申すの三上山ハ七峯此侍よ
わくして武を執りて古よ抱もつら
いて〜田上山よ古人をさうぬとや
う山嶽千丈の峯袴腰こいよ山も黒
津の里い〜と後うをありて獨伐志

よう〜とらふらん美を集の海あり
きりね眺るを〜とあり〜とありとほ乃
空よこの道のほり松の棚作葉の因を
をを〜と名を腰掛と名を彼海棠
よ果を〜と主と侍を〜と蒼を
ほく〜王公羽除侍よあ〜唯懸
群山民と〜と扇顔よ是を〜と
や〜空山よ風を〜と折て〜と

く心す先ある可き谷の清水を
汲く自らたぐくくくの水を備へ
一炊の備いしうりし昔侍さんか
けよんくくく侍あり侍りてくくく
る物しきくくく一持佛一筒と降て夜
の物みまじくくくくくくくく
くりさふまを能世系くくくくの侍と
か茂の申装へくくく嚴子くくく

洛よのほちりくくくくくくくく
くく額とくくくくくくくく
深く幻住菴のくくくくくくく
草菴の記念とありぬくくくく
くく旅の後とくくくくくくく
くく一本の梅を越の愛慕し
枕のとれ極よぬくくくくく
ぬくくくくくくくくくくく

里の竹のこたえ入りていの志乃稻
くいあー鬼の豆細よりあや
家守らぬ農談月殿よ山の端よ
くまき夜屋歸よ月を待つて
新を付ら燈を取ての園雨よ是れ
なうさすいこいこいさぬよ
深寂をぬこ山野よ跡をかくて舞
とふあはれやこ病をぬくは供てを

まいこい人よ似より情年月れ
後こ独り身れ程をまのよ
あはれは官愈命れ地をさ
やこい佛離祖室の扉よ入
ら舞をさすあはれなすはる
よ身をせめ花鳥よ情を芳し
暫く生涯のさうわすとさあれ
路よす能無さうてけ一筋よつみ

く樂天ハ五臟を神とせり老拙ハ
二瘦より賢愚文質の二々々々
さるものつまらぬの柄ありや
みまゝに捨てぬ

いんどのし推れあのるるま

題芭蕉翁國分山

幻住菴記之後

何世無隱士以心隱為賢
也何處無山川風景因人
義也間讀芭蕉翁幻住菴
記乃識其賢且知山川得
其人而益義矣可謂人与
山川共相得焉迺作鄙章
一篇歌之曰

琴湖南分國分嶺

古杏鬱兮綠陰清
 茅屋竹椽總數間
 內有佳人獨養生
 滿口錦繡輝山川
 風景依稀入誚城
 此地自古富勝覽
 今日因君尚益榮
 元祿庚午仲殊日 震軒具州

儿右日記

時多北月中つてやる林扉の
 とくさんた跡たつやまの
 鶏もさうく鳴る鳥なり
 海は五月雨のぬやう
 軒らうき岩梨やうれ積の
 細腰やうきやうまの
 曲水 野水 去来 凡兆 千那 珠碩

贈紙帳

おもゆる紙地よりさくら
野徑

いしをきて路のなまよりさくら
里東

虫をよそふよりのさくら
膳所 乙加

顔や降乃中れ花よりさくら
怒誰

多やし一室よりさくら
探志

五羽六羽菴よりさくら
膳所 元志

木つらたわしと鳴る水鶏
泥土

笠あふり椀よりさくら
史邦

月待や海を鹿目よりさくら
正秀

志つらさい粟の葉洗し清水
柳陰

涼さやともいまうし椎よりさくら
如行

訪より留らさあり

椎のよもよりさくら
膳所 朴水

目下やまはぬ程は海涼
市隱

文よ云はす

接所まや早苗のさくら
半残

麦乃穀をよまき度す

一坊にこれや身お田のこころ 麦 之道

書音

長崎

一隻入るふさくらや蟻のしる 魯町

夕立や梅木の奥に一志さうり 及肩

昇袿腰掛

梅のや田と山麓をさうり 尚白

贈箋

志々ふゆのまゝこあしみのしる 北枝

よ履のく侍よりさうり 木節

包紙の書

膳所

縁よすす葉袋や花の露 扇

稲のふくれを佛にまき 智月

石ふやけく果下り 輝の風 羽紅

桶の輪やまねて 昌房

里のまぐり 何処

啼わい〜塙ははりあ〜
越人

越人とい〜訪合て

筆の交れ借よ飛入菴のれ
等哉

明年弥生尋旧菴

春のあや〜の星〜戸たひつ〜
嵐蘭

同集

涼〜ちり〜居をよ〜位拵〜
曾良

音ネリ

跋

猿蓑者邑蕉翁滑髻之首韻也ナリ

非比スルニ彼山寺偷衣朝市頂冠笑

只任スレニ心感物写興而已矣洛下

逸人凡兆去来随翁遊學棋館

竹窓躡コハス等凌節斯有歲屬撰コラコロ此

集玩弄無已自謂絶ラク超スル狐腋白

裘者也於ナリ是四方嗟友憧々ト往

榭セ

腋アキ肘コ

憧ト行不絶ト見

日_レ蘊_レ月_レ隆_レ盛_レ
昆中_ニ三_レ白_レ

騷士_レ詔_レ詩_レ人_レ為_レ詩_レ人_レ意_レ以

城_レ樹_レ果_レ果_レ以
不_レ一_レ變_レ以_レ以

來_レ或_レ千_レ里_ニ寄_レ書_ヲ々_ニ中_ニ首_ニ有_レ佳_レ句_ニ
日_ニ蘊_レ月_レ隆_メ各_ニ程_ニ文_ニ章_ニ然_レ有_レ昆_ニ仲_下
騷_ニ士_ニ不_ニ集_レ錄_者索_レ居_ニ竄_ニ栖_レ為_レ難_ニ
通_レ信_ラ且_有旒_下倪_レ婦_レ人_レ不_ニ琢_レ磨_者
廉_レ言_レ細_レ語_為喜_上同_レ志_{スルカ}雖_レ無_レ至_レ其_下
域_ニ何_ニ棄_レ其_レ人_ヲ乎_ニ哉_果分_ニ四_レ序_ヲ作_ス
六_レ卷_故不_レ遑_{カウ}廣_レ搜_{ルニ}他_レ家_文林_也
維_レ旼_元祿_四稔_卒未_レ仲_其余_掛

接_レ以
揚_レ以

錫_ヲ於_レ洛_陽旅_亭偶_ニ會_ス兆_來吟_席
見_レ需_下記_此支_下題_中昏_上尾_卒援_毫不_レ
揣_拙庶_幾一_下襄_高張_有補_干詞_海
漢_人云

風_狂野_衲

文_州漢_書

正_竹書_之

京_寺町_二条_上ル_一

井_筒屋_庄名_衛板

